国際関連情報 Report from IASB

# マクロ・ヘッジ会計プロジェクトの難しさとやりがい

ASBJ 専門研究員　山下（やました）　裕司（ゆうじ）

昨年12月より、国際会計基準審議会（IASB）のマクロ・ヘッジ会計プロジェクトに、Visiting Fellowという立場で参加しております。これまで4回ロンドンに出張し、その度に内部での打ち合わせや理事会に参加致しました。3月には、初めてスタッフ・ペーパーの執筆を担当し、理事会での説明や質疑対応も実施しました。まだ不慣れではありますが、少しずつ、自身初の体験である国際機関での仕事が、軌道に乗ってきたように感じています。

ヘッジ会計というのは、「混合会計モデル」の落とし子のような会計基準です。貸出や預金といった通常の金融資産・負債は償却原価で測定される一方、デリバティブは公正価値で測定されます。これは、各々の金融商品としての特質（デリバティブは元本の交換を伴わず、かつリスク・プロファイルの加工が容易である点など）を踏まえているという点では妥当ですが、ハイブリッド型モデルゆえの問題も発生します。典型的なのは、償却原価で測定される貸出や預金の金利リスクを、デリバティブであるスワップでヘッジした場合、測定原則が異なることに伴って生じるaccounting mismatchです。この問題への対処を目指すのがヘッジ会計です。中でもマクロ・ヘッジ会計は、貸出や預金が、中身が刻々と入れ替わるオープン・ポートフォリオとして管理されているという特殊な状況に対応することを目的としています。

当該プロジェクトに携わっていて非常に難しいと感じるのは、会計思想および会計実務の両面において、見解の対立軸が輻輳している点です。

中でも最大の難問は、会計の原則に対し、例外はどの程度認められるべきかという、およそコンセンサスが得られそうにない論点です。様々な議論を重ねて「混合会計モデル」を原則とした以上、例外は認めるべきではない、あるいは認めても極めて限定的であるべきとの考え方があるのは当然です。しかし、あまりに原則にこだわると、作成者のビジネス・モデルとかけ離れた財務諸表が出来上がります。さりながら、作成者のビジネス・モデル（例えば金利リスクのヘッジ行動）が企業によって異なる以上、ビジネス・モデルを尊重し過ぎると、財務諸表の比較可能性が損なわれるだけでなく、原則そのものが無意味化してしまいます。マクロ・ヘッジの場合、この問題が特に深刻です。

しかも、具体論に入ると急に内容が恐ろしくテクニカルになり、本件に興味を持つ人以外は、眠くなるというリスク（？）も抱えています。実際のところ、スタッフ・ペーパーを執筆していると、会計というより金融工学のペーパーを書いている気がしてきます。本来は極めてテクニカルな内容である「流動性預金の金利

リスク管理」等が、お膝元のEUがカーブアウトしたという経緯から（唯一のカーブアウト項目）、IASBにとって政治的にも重要になっているという難しさもあります。

このように、もつれた案件であるだけに、理事会や関係者の合意形成を図るのはかなりのチャレンジだと予想しています。しかしそれだけに、スタッフとして大きなやりがいを感じています。スタッフの最大の仕事は、多くの人にとって「ここは譲れないが、ここまでは妥協できる」という着地点を見出した上で、合意形成を図ることだと考えています。微力ではありますが、質の高い基準開発に貢献していきたいと、思いを新たにしているところです。